

David Hume の歴史観における経済

—『イギリス史¹⁾』の再検討—

大野 精三郎

I 問題——『歴史』における経済の位置

本稿は、スコットランド歴史学派の最も重要な先駆者の1人 David Hume の『イギリス史』における経済の地位、役割および意義を、『歴史』の根本的意図に遡って明らかにすること、いいかえれば、『歴史』のなかで経済をとりあつかう根本的視角を、『歴史』の全構造的関連のなかから明らかにし、その『イギリス史』再検討を1歩前進させることを企図している。というのは、これまで『歴史』は、Hume の全著作から切り離され孤立的に取り扱われてきたし、また『歴史』それ自体の叙述形式が先駆者の業績にともないがちな旧時代の構成を踏襲していることから、しばしば不当な、ときには相対立する評価を与えられてきたからである。第1の事情は、Fueter の古典的解釈²⁾以来、合理主義あるいは理知主義批判者としての哲学者 Hume を無視して、『歴史』のなかで合理主義的歴史家 Hume をみいだすことに努めてきた伝統を生んでいる。そして第2の事情は、『歴史』を長くイギリス政治史とみる見解を確立させ、その政治学的側面、Hume の見解が、自由主義か、あるいは保守主義であるかに関心を集中させる結果を生んでいる。そして『歴史』の経済史的側面を問題にしたひとつとでさえ、経済がそのなかで付随的に取り扱われていることから、経済をふくめた法、財政および学問などの文化史的

側面は、これまた Fueter の古典的解釈以来、同時代のフランスの歴史家 Voltaire の先従を追う試みとされ、「前後の関連のない屑袋³⁾」という評価にまで貶められている。しかし、これについては、古くは同時代の Adam Smith は「唯一の自由主義的経済史家⁴⁾」として評価しているし、また最近では、Abbot 教授は、この側面の Hume を文化史の先駆者、すなわち「新たらしい歴史の父⁵⁾」とよぶなど相反する評価を生んでいる。

これらの問題状況は『歴史』を改めて再検討する機運を齎らした。しかしこの作業は、これまでの Hume 研究の過程が示すように、『歴史』のなかから経済についての叙述を孤立的に抜萃することによっては果されないであろう。むしろ逆に、哲学と『歴史』との関連、『歴史』のなかでの経済の意義と役割についての、総合的・総体的理解を必要とするであろう。そのためにわれわれは先ず、Hume の哲学との関連を顧慮しつつ、『歴史』のなかでの経済の位置を明らかにし、次いでそのなかでの経済の意義と役割とを明らかにすることにしたい。

ところで、『歴史』は純粹に年代史的構成をとっている。すなわちイギリス国王の各治政が章別にわかれて個別的にとりあつかわれ、そのなかで、国王の即位と死没の間の重要な出来事が述べられている。そして各治政の末尾に「雑録(Miscella-

1) *The History of England, from the Invasion of Julius Caesar to the Abdication of James The Second 1688, 1756—1762.* 本稿では発行年不詳の New York, Harper & Brothers 刊行の6巻本を底本として使用し、『歴史』または H. と略記して引用する。

2) Ed. Fueter, *Histoire de l'historiographie moderne*, Paris 1914, pp. 452—456.

3) J. B. Black, *The Art of History: A Study of Four Great Historians of the Eighteenth Century.* New York 1926, p. 115.

4) Adam Smith, *Wealth of Nations* (Modern library), p. 385.

5) Wilbur C. Abbott, "David Hume: Philosopher-Historian," *Adventures in Reputation*, Cambridge, Massachusetts 1935, p. 129.

neous Transactions)」として、その治政下で公布された重要な法律あるいは人民の生活状況などがつけ加えられているが、これらの事項はさらに拡大・整理され、すなわち、主要な制定法のほか、人民の経済生活、財政、重要な発明および科学の状況などのいわゆる文化史的事項が、主要な治政の終りに、「付録(Appendix)」として、独立してとりあげられ、それ自身統一的に述べられている。この構成は、『歴史』を、その大半が各治世における国王の行動とその軍活動が大半を占めるところから、一見、年代史変化のそれであるように思わせている。しかしけっしてそうではない。Humeの主要な興味は、経済・財政・科学などの歴史にあること、いかえれば「雑録」と「付録」のなかにあることを、かれ自身、『歴史』のなかで明快に述べている。かれによれば、これらの事項は「時代の精神」(H. Vol. III, p. 311)を示すものであり、「その時代の風習を示す瑣末な諸事情でさえ、戦争や交渉の大事業より、教訓的であり、同時に興味深いものである」(H. Vol. IV, p. 41)と。さらに進んでかれは、「これらの事項(政府、風習、財政、武器、トレードおよび学問—筆者)について正しい理解が形成されないばかりには、歴史は教訓的でありえず、しばしば理解されないものとなるであろう」(H. Vol. IV, p. 496)とまで云っている。これによってみても、Hume自身そのおかれた位置とは別に『歴史』のなかで社会史的アプローチがきわめて重要な意味をもっていることを明らかにしているというべきである。『イギリス史』全体は、Humeの意図によれば、自然状態から文明に向う「人間精神(human mind)の歴史」(H. Vol. V, p. 84)であるからである。ここからはじめて、『歴史』の構成を整理して、その全関連のなかでの経済の地位と意義を明らかにすることが必要となってくるのである。

II 社会の道徳的・文化的発展における arts とインダストリー(industry)

しかしHumeは当初から自然状態から文明へ向う人間精神の歴史を書くことを意図したのではない。かれによれば本来歴史研究の意義は読者の

空想力を楽しませ、興味を刺戟するとともに、現代に教訓を与えることにある。従ってこの教訓を与えることのできる時代、すなわち政治・社会制度および文化的風習において現在と類似性をもつ時代の研究こそ価値があると考えられる。これこそがHumeをして、その歴史叙途にあたって先ず近世、すなわちStuart王朝の時代からはじめ、逆にAnglo-Saxonの時代にまで遡ってゆく方法をとらせた理由となっている。野蛮民族の曖昧な・無意味な諸革命に、われわれは余り関心をもつべきではない、とHumeは考える。それらの革命は食欲、流血と残酷さが注意をひくが、みな同じような原因と結果を伴っている。しかし、Humeをしてこのような粗野な時代をとりあげ、『イギリス史』を完成させた根本的動機を『歴史』のなかで、つぎのように述べている。すなわち、この時代がartsと科学が極めて未発達であったことが重要な特徴であると指摘したのち、「これまでの時代の歴史(近世初頭15世紀まで—筆者)はまったく興味がないこともなく、かつ非教訓的なものでもない。様相を著しく異にする人間風俗を考察することは、有用であるとともに愉快である。ある時期の様相がいかにも怖るべく畸形のよう見えようとも、われわれはそこから徳(virtue)と人間愛(humanity)に極めて密接な関連をもち、迷信に対して優れた解毒剤である科学と礼讓(civility)とはまた、あらゆる種類の悪徳と混乱とに対する最も効果のある対処策であることを学ぶことができよう」(H. Vol. II, p. 507)。ここに『歴史』の基本視点があらわれている。すなわち『歴史』においては、経済それ自体の発展を問題とするというよりは、広く人間社会の文化的・道徳的進歩が最も基本的な問題であること、そしてそれとの関連において経済の発展が問題とされ、それが人類の道徳的進歩に科学と並んで重要な役割を果すことを明らかにしようとする視点である。この視点からみて、粗野な自然状態の原因は、artsと科学が存在しないこと、あるいはその発達が著しく未成熟の状態にあることに帰せられている。そして1国民の道徳的進歩は科学と教育とに依存していることが自ら明らかにされて

いる。

そこで最初に、文明を野蛮から隔てるのに最も重要な arts の意味を明らかにしておかなければならない。Hume における arts の意味は、学史家 Johnson 教授⁶⁾の指摘するようにきわめて多義的な意味をもっている。arts はときには liberal arts とよばれ、科学と同意語として使われている。このばあいには人間を他の動物よりも優れた存在とする 1 つの能力、人間のもつ文化能力を意味している。またときには mechanical arts とよばれているが、それは自然に対立する産業技術を意味する。Hume には広義の arts あるいは科学は、民衆の職業になってはじめて完成するという理解があるので、arts はインダストリーとほぼ同じ意味で使われている。従って Hume が経済活動一般を意味する industry, commerce および manufacture などの語は arts と結合して使用されているところから、Johnson 教授の指摘した arts とほぼ同一の意味をもち、広く産業活動を包含する意味をもつと、いうべきであろう。ところで問題は、このように理解された arts と industry の発達に人間社会の道徳的進歩、文明社会の特徴である徳と人間愛に如何に結びついているかを Hume に従って明らかにし、次いで、それと

対比される野蛮の状態をみておこう。

Hume は、先づ arts と industry の発展にともなう趣味の洗練と知識の増大を指摘する。とくに商工業の発達にともなう都市化は、ひとびとの社会生活を一層密接にし、知識の伝達を容易にする。すなわち都市生活において、相互に会話する機会の増大と相互の楽しみと娯楽を増進する習慣そのものから人間愛が増大すると Hume はみているのである。このような現象から、さらに進んで個人と社会との関係を哲学的に説明するものは、Hume の同感 (Sympathy) の理論である。かれはそれを精神の交感伝達 (communication) として理解しているが、それは観察者のなかに他人の情緒の観念を自己の印象へ転換させ、他人の快苦と同じ感情をひきおこさせる人間精神に固有な特質を示している。いいかえれば、同感とは人間の社会性をあらわす特質にほかならない。共感は本来、「われわれ自身にたいする関心よりもはるかに弱いものであり、また、われわれから遠くはなれている人々にたいする共感は、近くに隣接している人々にたいするそれよりも、はるかに弱いことをわれわれは認めるであろう⁷⁾。」しかし商工業の発達は、人間をもっと緊密に結びつける社会の基礎を拡げ、人間愛にたいする刺げきを与える。そればかりではない。このような社会は、内部での個人そのものの名声についての関心、いわば自尊心を増大させ、「われわれは、他人がわれわれ自身について抱く心持に自然に共感するのである⁸⁾」「このいわば反照において自己を吟味する一定の習慣は正邪のすべての感情をいつも生き生きさせ高潔な人々に、他人に対してのみならず、自分自身に対しても尊敬の念を起させる。そしてこの自尊心こそあらゆる徳を最も確実に守護するものであ

6) E. A. J. Johnson; *Predecessors of Adam Smith, the Growth of British Economic Thought*, London 1937, pp. 272f. かれはこの問題について特別に 1 章をさき、詳細な分析をおこなっている。本文で述べられたもののほか、arts の意味内容をつぎの 5 つに集約している。1) 自然に対立する人為的生産力を意味し、自然的富よりむしろ人為的富を生みだし、インダストリーと節約を刺激する。2) 労働を短縮するものとして使用される。3) 発明と熟練した工夫として、これも労働の生産性を増大し、生活必需品の生産を増加せしめ、より大なる人々の維持を可能にする。4) 製造工業を発展せしめるものとして。すなわち財の種類を増加せしめ、その価格を低下させる。そして輸出品に具現された arts の輸出は 1 国により大きい財宝と輸入品を獲得させる。5) 1 つの独立した生産要素としての発明の才ある労働。6) 労働を短縮し、国富を増大する結果、学芸上の洗練を生み出すものとして。筆者は Johnson 教授の解釈が Hume にも妥当すると考えている。なお arts と結合した Hume の industry の概念については、田中敏弘「デイヴィッド・ヒュームの経済理論——そのライト・モチーフとしての『Industry』——」『経済学論究』第 13 卷 3 号を参照せよ。

7) David Hume, *An Inquiry concerning Human Understanding*, p. 215. 福鎌達夫訳『ヒューム 人間悟性の研究』(1948 年)90 ページ。Hume からの引用はすべて *Philosophical Works of David Hume*, ed. by T. H. Green and T. H. Grose, 1882. による。

8) David Hume, *Treatise on Human Nature*, p. 499. 大槻春彦訳『デイヴィッド・ヒューム 人性論』(1952 年)第 4 分冊, 77 ページ。

9) *Enquiry concerning the Principles of Morals*, p. 276. 松村文二郎・弘瀬潔訳『ヒューム 道徳原理の

る⁹⁾。かくしてこの社会においてはじめて「人間の行動および挙動に関する一般的観念が形成される。人々がしかじかのばあいには、しかじかの行動をとるべきことが予想される。甲の行動は、われわれの抽象的規準に合致する行為であるが、乙の行為は合致せざる行為であると決定される。そして自己愛の特殊な感情はかかる普遍的な原理によってしばしば抑制され、かく制限されるのである¹⁰⁾。』『歴史』では arts の発達、この哲学的観点から広汎に観察され、歴史によって確証している。まず arts と快樂および社交の増大が、都市のより温和な・開化された傾向を生みだしはじめた(H. Vol. IV, p. 505)のは Stuart 王朝のジェームズ I 世の時代、すなわち 17 世紀の初頭からであることが指摘されたのち、このような社会での個人的徳、すなわち私利私欲を制御するに役だつ恥、義務、名誉などの社会的に有用な美德が尊重されるようになったと述べられている(H. Vol. V, p. 331)。また arts と industry の増大が、下層人民の独立心を高め、それによって盗み、詐欺などの犯罪がいちじるしく減少したことなどに及んでいるのである(H. Vol. III, p. 315)。

このような文明社会に対比される野蛮社会の特徴は、『歴史』のなかでのつぎの文章から明瞭に看取できよう。Hume は Anglo-Saxon の社会について述べている「付録」のなかできわめて簡潔に述べている。「Anglo-Saxon の風習についてわれわれは極めて僅かしか述べることができないが、かれらは一般に粗野や無教養な人々であり、文字を知らず、mechanical arts に習熟しておらず、法と政府への服従に慣れず、放縦と盗みと混乱に身を任せていた。かれらの最善の資質は軍事的勇氣であったが、しかし訓練や指導によるものではなかった。国王への忠誠やかれらの間での信頼がなかったことはかれらの後半の時代にあらわれているし、人間愛に欠けていることは、その全史を通じてあらわれている」(H. Vol. I, p. 177)。arts の欠けている結果、野蛮社会での社会生活の基礎は極めて狭隘である。かれらの対人関係では専ら狭

い愛憎の観念によって規制される。かれらは「その愛憎を、主として私利私欲および損害の観念により規整し、行動に関する一般的規則もしくは体系については微々たる想念しかもっていないことは、理性と経験に徴して確実であると思われる。かれは闘争の敵対者をほとんど不可避的な現在の瞬間だけでなく、その後永久に心の底から憎む。そして最も嚴重な処罰と復讐とをしなければ満足しないのである¹¹⁾。」Hume はこのような社会を冷静に観察し、その社会の特徴を道徳哲学的観点からあますところなく『歴史』のなかで批判している。「粗野な・しかも野蛮な状態で生活しているひとびとの日常の真実さと誠実さについて、われわれがどのように想像しようとも、かれらの間には文明諸国民よりもきわめて多くの嘘偽や偽証さえある。より拡大し、より涵養された理性にほかならない徳は少しも栄えなかったし、また、よき教育が一般的となって、ひとびとが悪徳、裏切りおよび不道徳の危険な結果について教育されているばあいを除いては、徳は、名誉という堅実な原理の上に基礎づけられていない。無知な諸国民の間ではもっと広くおこなわれている迷信でさえ、知識と教育との欠陥を貧弱に埋めているに過ぎないのである」(H. Vol. I, p. 171)。Hume はこの最後に挙げた迷信のなかに人間のあらゆる道徳的・知的野蛮化の出発点、すなわちこの時代に共通な多くの不快な・恐怖にみちた過程、無感覚、野蛮な戦争や殺人行為の主要な動機を見いだしている。そして科学こそが、この迷信にたいする最善の薬であると評価しているのである。このように道徳の起源と発達を社会のなかでみている Hume はここから重要な結論を引きだしている。「良き道徳と知識とは、あらゆる個人においてではなく、あらゆる時代を通じてほとんどきりはなし難いのである」(H. Vol. I, p. 74)。

このような文明と野蛮との対照は、『歴史』の方法に若干の疑問を提出するように思われる。『歴史』は「哲学」において確立された方法、自然界における因果律の探求の方法を模範として、

研究』(1949年), 160 ページ。

10) *ibid.*, p. 250. 邦訳, 157 ページ。

11) *ibid.*, p. 250. 邦訳, 158 ページ。

人間社会のできごとを人間の本性から説明するところにあった。そこではあらゆる国民またはあらゆる時代の人間行為のなかには、大きな斉一性が存在すること、ならびに人間の本性はあらゆる時代と国において、その原理と行為において同じであるということが前提されている。それだからこそ同じ動機は同じ行為をひきおこすと考えられているのであるが、このことは野蛮と文明の対照のなかに如何に考えられているのであろうか。また野蛮から文明に向う進歩が、知識の増大にあるとするならば、それは「哲学」における理性の人間行為における役割を狭く理解し、道徳におけるその役割を否定した Hume と如何なる関係にたつのであろうか。これらの疑問は改めて『歴史』と「哲学」との関連を問うことになるのであるが、ここでは『歴史』から答えておこう。Hume は人性があらゆる国と時代とにおいて同一であるという「哲学」を『歴史』において否定したのではなく、教育、模範および習慣においてみられる人間相互の相違を現実的に観察し認めたのである。また知識の増大は、人間社会の習慣の集積・拡大から生ずることを強調した哲学者 Hume は『歴史』においてもまた一貫している。風習と慣習こそ人間の行為を導く原理であり (H. Vol. IV, p. 105), 「理性ではなく、習慣が人間の指導原理である」ことは (H. Vol. V, p. 4), 『歴史』において繰り返し述べられているところである。

III 商工業の発達とイギリス革命

Hume によれば、arts とそれに伴う知識の増大の結果、市民生活の完成、すなわち法、秩序、行政、規律が齎される。しかもこれら文明の所産は——と Hume はいう——「人間理性がそれを使うことによって洗練され、もっと世俗的な、少くとも商工業の技術に使用されるまでは、けっして完成の域に到達することはできない¹²⁾。」ここに Hume が『歴史』のなかで近世史を、とくにヘンリー 8 世の治世を重要視した所以がある。すなわち 16 世紀初頭の印刷術、火薬および航海術

の発明は、宗教改革をひきおこし、近代史の最も興味のあるかつ有益な部面がはじまるのである。

この端緒は、技術の発明から起った風習の変化、すなわち新たな気質から起った。arts と industry に欠けていた中世の大資産家たちは、かれの土地の生産物のうち耕作者の生活を維持しな余った大部分と交換しうべき何物をもたないから、その全部をその家庭における田舎風の款待に消費する。もしこの余剰生産物が 1 千人を維持するに足るとするならば、それ以外に利用することはできない。そこでかれはつねに多数の従者および家の子にとりかこまれているが、これらのものはその扶持に酬いべき、なんらの対価を払わないで専らかれの恩恵に浴して生きるのであるから、かれらが服従せねばならないことは、なお兵士がその備わっている君主に服従しなければならないのと同じわけである。arts と industry が次第に拡大されてゆく結果、先ず「貴族は、かれらの従者の数とその勇敢さを互に競い合うことをやめ、次第にもっと開化された種類の競争心をもち、自分たちの装備や家屋、食卓の豪華さと優雅さにおいて優るよう努めた」。エリザベス女王時代には、銀の食器、衣服などが競争の対象となった。他方、「平民はもはや上級者によって怠惰のなかで維持されることをやめ、なんらかの職業または industry を学ばなければならなくなり、自分自身および他人に対して役立つようになった」(H. Vol. III, p. 71)。Hume はこの arts の齎した社会的変化に対して、その意義をすでに述べたように、全面的に肯定している。「昔ながらの款待は、悪徳、混乱、動乱または怠惰の源泉であった」(H. Vol. IV, p. 374)。しかし「arts における洗練または奢侈とよぶものに反対して激しく非難する人々があるにもかかわらず、勤勉な tradesmen は以前の大資産家に依存した従者の誰よりも、よりよき人間であるとともによき市民であればあるほど、近代貴族の生活も、古来の荘園生活より賞讃すべきである」(H. Vol. III, p. 71)。

arts と industry は、それに従事する階層に独立を齎す。そして industry はその成立からなによりも自由を要求する。「職人は、かれらの利

12) David Hume, *Of Refinements in the Arts*, p. 301.

潤がかれらの顧客の最負によって増すことを知るならば、その技巧と勤勉とを増すようになる。かくして、事物が不当な干渉によって妨げられざるかぎり、商品はずねにその需要にほぼ比例する程度に存在することはほぼ確実である」(H. Vol. III, p. 128)。貴族が奢侈品にその富を使う結果、ほぼ16世紀初頭から、「下層のひとびとも土地を所有する仲間入りができるようになり、また資金・商品・技術・債権・のれんなどの新たらしい種類の財産をみずからつくるようになった。この財産の増加によって平民の権利は増進し、国王も貴族が、すでに以前のような粗野な生活に耐えず武事を捨てざるのみをみて、常備軍を設け、国家の自由を掌握したのである」(H. Vol. III, p. 71)。tradeを営む階級の地位はさらに高まり、エリザベス女王の時代には「富裕、強力になりはじめ」(H. Vol. IV, p. 375)、Stuart王朝のジェームズI世の時期に至って国民と国王との政治的闘争がはじまる。Humeはイギリス革命の一般的原因(a general cause)がartsとindustryの勃興による風習の変化にあること、「風習の変化が政治の革命の主要な原因」(H. Vol. IV, p. 375)であることを、決して見逃してはいない。「artsの導入と進歩から得られるひとつの主要な利益は、自由の導入と進歩であるからである」(H. Vol. II, p. 511)。Humeは中世における権力、暴力政治に対して、商工業を中心とする都市における自治政府がこの自由の政治的制度の起源であることを指摘しているが、かかる特権的制度ではなく、全国民的自由の政治制度の要求が、従ってその根底における国民的規模でのartsとindustryの発展が、イギリス革命の一般的原因であるとしているのである。

「市民的自由」(civil liberty)の諸原理の実現を求める力は、イギリス革命において宗教的自由か求めるプロテスタント諸党派の要求に鼓舞されて、特有な過程をたどることになる。Humeはピッリタンの努力に1688年の名誉革命が負うところを決して隠してはいない。「その時代(Elizabeth時代—筆者)に、同時代の著述家Camdenやその他の歴史家にも殆んど注意されるどころとならなかつたにせよ、事実国王の権威が圧倒的であつた

のに、自由の貴重な火がつけられ、維持されたのはピッリタンによってのみであった。この党派の原理が如何に瑣末であり、その習慣が如何に奇怪であろうとも、イギリスはその憲法の全自由をこの党派に負っているのである」(H. Vol. IV, p. 141)と。ここで政治的自由と宗教的自由の要求が結合したイギリス革命の過程についてのHumeの見解をあとづける余裕はない。ただこの関連において問題となるのは、Humeがこのような功績を認めるにもかかわらずなぜピッリタンに反対しているかについてである。ここでもHumeは『歴史』の根本視点を一貫して堅持している。「宗徒は上級の指導を辞退し宗教的敬けんをよそおってみずからの貧欲を勝手気ままにみたしていた。この精神によって生みだされた腐敗に加え、それはすべての道徳的紐帯を斥け、かつぐずぐずにし、全領域、いな神の許しを、人間精神を自然のままにしておけば伴いがちな利己心と野望とに委ねたのである」(H. Vol. V, p. 331)。また、かれによれば、この党派のもつ熱狂主義によって優雅な楽しみや娯楽がまったく抹殺されたばかりではない。人間の精神を拓げ、気質を和げる学問自体でさえ、この党派にあっては伝染病的狂熱を高めるのに役だっているに過ぎないのである。経済との関連で特に注目し得るのは、このような宗教的対立を寛裕(toleration)によって社会生活の背後にしりぞかせ、経済を中心とした社会生活、すなわち商業社会の建設こそが、最も重要であるというHumeの見解である。Humeはいう。「宗教的諸党派が拡大し、強固に根をおろしてしまつた後は、無制限な寛裕こそが、かれらの狂熱を鎮め、市民的結合(civil union)を宗教的差別以上の優越性を与えるための唯一つの手段である」(H. VI, p. 162)と。ここでの市民的結合とは、経済的結合にほかならないのであって、イギリス革命は、最終的にこの宗教的寛裕を制度的に確立することによって、経済関係に社会における支配的地位を認めることになつたし、宗教をしてその本来の地位、すなわち人間の精神を浄化し、道徳的義務を強め、法と支配との服従を確保することにおかしたのである。この意味でHumeによれば1688年の名

啓革命こそ、政治的自由の制度ばかりでなく、宗教的自由をも確立し、その後の商業社会の発展の基礎・出発点となったのである。

しかし以上の論述によってわれわれは Hume をして、自由主義の代表者とみてはならない。かれが arts と industry の発達を広汎な・社会的・道徳哲学的関連のなかからあとづけたかぎり、かれは確かに経済的自由主義者として現われている。しかしかれの『歴史』のもつ他の重要な一面、その政治哲学との関連でみなければ、われわれは『歴史』の全体像を明確にしたとは云えないのであって、それは本稿を超える領域の問題であることを忘れてはならない。

IV 古典派経済学への道

——結論に代えて——

以上われわれは『歴史』のなかに現われた Hume の経済観をあとづけた。それによって Hume が経済を「付録」, 「雑録」のなかでとりあげながら、事実上『歴史』のなかで中心的地位を占めていること、その発達によって文明と野蛮とが区別されること、経済が広汎な社会的・文化的・道徳的観点のなかで捉えられていることを明らかにした。しかし Hume はこの観点を『歴史』のなかで明示もしていなければ、ときには、これが『歴史』の本体を構成していないと否定的な叙述さえ行っている。このことが、『歴史』の旧套を墨守する構成と相俟って、『歴史』の理解を困難にしたばかりでなく、「付録」の意味を軽視させ、ひいてはそれを、文化的諸事項の「屑袋」という厳しい

評価を齎らしたのであろう。『歴史』における根本的観点を明らかにした今、われわれは、Hume 以降のスコットランド歴史学派がこの課題を一層徹底した形で遂行したことは、例えば Adam Ferguson の『市民社会史論 1768 年』という書名のみをもってしても、このことを明らかに示すことを知るであろう。この意味で Hume の『歴史』は、スコットランド歴史学派の先駆者、または問題提起者の地位を占めているというべきである。

またこのことを『歴史』の内容に即して云ってみれば、次のように云うことができよう。すなわち経済の発達をそれ自体として追求せずそれを広く社会的・政治的関連のなかで捉えていること、いかえれば経済を他の社会現象から切りはなさず、それをふくむ社会の総体的把握への道を『歴史』は明らかにしていることである。mechanical arts は、industry と commerce の発展に必要であり、その発達は、ふたたび人間の諸能力を拓げることによって liberal arts を促進する。そしてこの開拓はふたたび経済に有利に作用するのである。Hume はいう。「偉大な哲学者や政治家、有名な将軍および詩人を生みだすと同じ時代は、通常、熟練した織工や船大工にも恵まれている。われわれは道理に従って、1 片の織布も、天文学を知らなかったり、倫理が無規されている国民のなかでは完全に仕上げられるということは期待できない」¹³⁾と。

『歴史』は、なぜ経済の問題がスコットランド歴史学派のなかで問題とされ、古典派経済学を生みだす母胎となったかについて、端緒的に、多くの暗示を与えているのである。

13) David Hume, *ibid.*, p. 301.